

副検事

平成30年度 任官

【経歴】

平成18年 検察事務官 採用

平成29年 副検事選考試験 合格



素敵な仲間に出まれ、楽しく仕事をさせてもらっています！

インタビュー

Q.これまでの経歴を教えてください。

平成18年度に検察事務官として関西の地方検察庁に採用されました。入庁後、検務部門で1年6か月間、※立会事務官として捜査公判事務を7年間、※検察官事務取扱検察事務官として捜査を3年間経験して、平成30年度に副検事に任官しました。任官後、東海の区検察庁で2年間勤務し、令和2年度から関西の区検察庁で勤務しています。

私は、大学卒業後、民間企業を経て検察事務官として採用されていますので、大学の新卒採用者と比べると数年遅れての採用でしたが、検察庁は既卒採用者も少なくなく、**やる気さえあれば誰でも活躍できる場**がある職場だと思いますので、新卒ではないことで尻込みする必要はないと思います。

Q.副検事を目指したきっかけを教えてください。

私は、入庁後、立会事務官として多くの検察官と共に捜査・公判事務に携わってきましたが、**困難な事件でも諦めずに真相解明に立ち向かう姿**や、**被害者や遺族と真摯に向き合う姿**を見て、検察官の仕事は責任の重大さゆえにやりがいも大きいと感じ、いつか自分も同じように検察官として仕事に取り組みたいと思い、副検事を目指すことを決意しました。

Q.現在の仕事内容を教えてください。

現在は、裁判所の法廷で戦うことが主な仕事です。起訴された事件について、犯罪事実及び情状を立証するために必要な証拠を厳選して裁判所へ提出し、必要な主張を行うなどして、被告人が行った行為に対して適正な量刑が得られるよう努めています。

Q.副検事に任官して良かったと思えたような経験はありますか。

副検事として常にやりがいを感じながら仕事をさせてもらっており、適切に事件処理をできたときなどには達成感もあり、副検事に任官して良かったと思うことは多々ありますが、これまでの経験で1番そのように感じたのは、**交通事故の被害者親族から感謝の言葉をいただいた**ときのことです。

その事故の内容は、信号機の設置されていない交差点における出会い頭の衝突事故であり、被告人は自動車を、被害者は二輪車をそれぞれ運転しており、被告人が一時停止を無視して交差点内に進入したことによって生じたものでした。被告人の過失は明らかであり、被害者は重傷で意識が戻らない状態であったにもかかわらず、被告人から被害者側に対して誠意ある対応は一切なく被害者親族の処罰感情は峻烈でした。この件では、被害者自身の意識が戻っていないことから、親族による心情の意見陳述及び被害者参加制度を利用いただき、入念に準備した上、公判廷で実施していただきました。判決後、公判に参加された被害者親族から「主人の無念さを少しは晴らせたと思います。担当してくれた検察官が〇〇さんで本当に良かった。ありがとうございました。」などと、ありがたい言葉をいただきました。

副検事に任官後、困難なことも多々ありましたが、「副検事に任官してよかった」と心から思えた瞬間でした。

あしがき

【副検事とは】

3年以上特定の公務員の職にあつて、副検事になるための特別の試験（副検事選考試験）に合格した者のことをいいます。

※立会事務官とは…

検察官と共に捜査や公判（裁判）業務を担当する検察事務官のことです。

※検察官事務取扱検察事務官とは…

検察官の事務を行うことができる検察事務官のことです。



検察官が身に付けている

「秋霜烈日」バッジ

「秋霜烈日」（しゅうそうれつじつ）とは、秋におりる霜と夏の厳しい日差しのことで、刑罰や志操の厳しさにたとえられています。